教育学研究科　特別支援教育・特別支援学校教育専修,（発達障害児指導法研究）
担当教員：長尾秀夫・苅田知則

附属特別支援学校における指導法研究にテレビ会議システム活用の試み

特別支援教育・長尾秀夫

１．授業の概観

この授業の目的は、特別支援教育に関する実践力をつけるために、特別支援教育の実践の場として附属特別支援学校の協力の下、児童にかかわりながら、支援を試みる。そして自らの支援を振り返って省察し、文献を調べ、教員とも話し合って、次の支援計画を立て、1 週間後に実践する。このＰＤＣＡサイクルを体感することが一つの目的である。もう一つは、実践の成果を客観的に表現し、授業時間の 10 回程度の実習で成果が上がる目標を立てることで、いかなる指導場面でも建設的な成果が上がる指導ができる能力を身につけることである。このような大きな目標に向けて、この授業では以下のシラバスを公開している。

（目的）

知的障害のある児童生徒に対して、附属特別支援学校で参与観察して教育の現状を知る。そして、児童生徒一人ひとりの支援計画、実践、評価のあり方を身につける。

（到達目標）

１）多様な発達障害のある児童生徒の特性を具体的に述べる。

２）それぞれの児童生徒に合ったかかわり方を学び、実際に実施する。

３)それぞれの児童生徒に合った指導計画の立案、実践、評価のプロセスを実践する。

この授業では、知的障害特別支援学校の授業を参与観察しながら、支援の記録をとり、具体的な実践報告をしながら、自らの実践力を養成する。

（授業計画）

第 1 回から第 15 回までの計画の概要は、はじめに実習についてのガイダンス、附属特別支援学校の見学、研究対象児の決定、支援目標の選定をおこなう。その後は毎週実践レポートを提出し、教員は毎回助言をする。途中で適時話し合いをもつ。最後にまとめのカンファレンスをして成果報告書を作成する。

そして、時間外学習は、実践の結果をまとめ、省察して毎回レポートする。成績評価は、授業中の討論への参加(20 点)、毎回のレポート(50 点)、最終のまとめ（30 点）で評価する。

以上がシラバスの内容である。附属校との関係もあり、若干変更を行った。第 1 回目に大学院生の希望する研究内容、対象児について話し合いをもった。そして、その希望を附属校に伝えて、対象児を推薦していただき、2 回目の授業で対象児童の在籍学級を見学させていただいた。第 3 回目からは、大学院生が 1 時限目の実習時間に授業支援者として参加して、支援記録をとった。そして、毎回その記録と次の計画案も入れてレポートし、それに対して教員は添削して、配慮して欲しいことを加筆した。同時に、第 3 回の 10 月 20 日からテレビ会議システムを使って附属校と大学の研究室で話し合いを行った。実習終了を 10 分早めて 9：50 とし、10-20 分間のカンファレンスを原則として毎回行った。2 月 9 日には最後のまとめを大学の研究室で行った。そして、実習のまとめの成果報告と成果報告書のまとめ方について話し合った。2 月 16 日には附属校へ実習のお礼の挨拶に行き、報告書を提出した。

以上が今年の実際の授業の流れである。

２．授業評価法

授業の評価は、受講生の側からの意見は、通常通り大学院生 2 名のアンケートをもって行った。しかし、2 名の受講生で匿名性が守れない結果についての評価方法はいかにあるべきか検討課題である。授業者による受講生の評価は成果報告書、毎回の実践レポート、討論への参加をもって行った。

３．授業評価結果

受講生による授業アンケートは通常の授業と類似のものと、テレビ会議システムについてのものとを行った。それぞれ質問について 2 名の点数（5 点満点）を報告する。

まず、通常の授業の修正版について、Ｑ１．授業の話し方はわかりやすかったか？５／５、Ｑ２．授業の構成・展開はよかったか？５／２、Ｑ３．授業の内容・レベルは自分にとって適当であったか？４／４、Ｑ４．この授業で新しい知識・概念が身についたか？４／５、Ｑ５．遠隔授業は実践の省察に役立ったか？５／５、Ｑ６．遠隔授業の助言は具体的で計画立案に役立ったか？５／５、Ｑ７．レポートは実践の整理に役立ったか？５／５、Ｑ８．レポートの返事は課題の発見、計画立案に役立ったか？５／４、Ｑ９．授業は教育支援に役立つ内容であったか？４／５、Ｑ１０．授業

は自分にとって満足いくものであったか？３／２（Ｑ１０の備考に、一人は視点を絞り切れていなかったとまとめていて反省しました。もう一人は未計画なところも多かったので、とあった）全体の備考欄に、一人が、子ども達と触れ合いながら、朝の活動に取り組めたことは、とてもプラスになったと思います、と書いていた。

以上の結果、授業がＰＤＣＡサイクルで展開する場合、授業は支援計画を立てる上で貴重な情報源となったと考える。しかし、不安を持つ院生もいたので、院生カリキュラム全体の中で初めての体験の場合は致し方ないが、修了までにはＰＤＣＡサイクルの授業に安心して取り組める、成功体験をする機会を設けなければならない。授業の内容については体験を通して学ぶ授業は歓迎されているようである。遠隔授業は高く評価されたので、今後も活用すべきであると考えた。レポートは省察として役立ち、また返事をすることが次の実践に役立つと思われた。授業の満足度については低い評価となっているが、ＰＤＣＡサイクルで毎回新しい状況が生じることに対応しきれなかったことが備考に書かれていた。この点については、その不全感の中から自分で道を切り拓き、自分で調べ、教員にも聞きながら、進める方法を学ぶのがこの授業のねらいであると、授業の初めから繰り返し伝えていかなければならない。これは今回の授業評価により、学んだことであが、ＰＤＣＡサイクルで実践力をつけることをねらった授業すべてに通じることかもしれない。

次に、テレビ会議システムを使った遠隔授業のアンケートについて報告する。

Ｑ１．遠隔授業で学んだこと？実践に対してすぐにアドバイスがもらえることが一番よかった。今した支援について感じたままをいえることはよかった。Ｑ２.遠隔授業から出てきた自分の課題？まとめる時間がないのでその日に一番印象に残ったことを何となく話してしまった。十分な支援計画ができていないことを痛感する場面があった。Ｑ３．遠隔授業で工夫したこと？言葉が聞き取りやすいように一つ一つの言葉をはっきり発音した。話すポイントを決めておくとよりよい話し合いができた。Ｑ４．遠隔授業が自分にとって役だったことは？実践後すぐに先生に助言をもらってまとめに生かせた。他の支援者の報告や先生の助言が新たな視点を生み、自分の支援の視野が広がった。Ｑ５．遠隔授業では不十分なこと？先生に現場そのままの様子を伝えにくいこと。前もって十分な分析ができないこと。Ｑ６．その他遠隔授業についての感想？実習場所が離れている場合、指導助言を受けるのに大変役立つと思った。レポートとの兼ね合いが難しかった。Ｑ７．遠隔授業はあなたにとってどの程度役立ちましたか？④かなり、③普通の評価であった。

これらの意見を基に、実習直後の遠隔授業は院生の感じたままの声を聞くのには有効であった。しかし、自分の中で消化し切れていないので、適切な話し合いという点では自分の考えを十分に発揮できなかったという印象が残るようであった。したがって、これに対しては遠隔授業は新鮮な感じたままを伝えることが重要で、その分析は実践レポートの中に文献も調べて入れるのが学習法であると説明しておく必要を感じた。また、遠隔授業は実習直後なので問題点が鮮明であり、その話がわかりやすく、省察のまとめにも役立った。一人の院生が遠隔授業の話し合いとレポートとの役割分担が明確でなかったと書いている。これには、事前にそれぞれの良さとして、実習で感じた新鮮な印象を基に話し合う遠隔授業、自分の支援を振り返り実践をまとめて、文献や話し合いも入れて考察するレポートについて、やはり事前に伝えておくことが必要であることがわかった。

４．まとめ

この授業において、大きく２つのことについて検討した。

一つは、大学院生を対象にＰＤＣＡサイクルを活用した実践力向上を目指した授業についての評価である。その結果、ＰＤＣＡサイクルの授業展開は見通しが立たず、初めての学習内容においては不安が生じやすいものであることである。これに対しては、カリキュラム全体の中で初めての試みと、その後数回のＰＤＣＡサイクルを活用した授業を行って、この方法の優れている点を体感して修了にもってゆくことが必要である。その成功経験がないと、不全感が残り、この優れた教育方法・実践方法が定着しない可能性がある。

もう一つは、テレビ会議システムを使っての遠隔授業の有用性についてである。実習直後に遠隔授業で話し合いをもつことは、今まで実習中に感じたことをありのままに話し、疑問に思ったことや困ったことについてすぐ話し合えたことは評価が高かった。しかし、話がまとまりのないものとなったことを気にしている院生もいたので、この話し合いは如何に生々しく感じたことを伝えるかが重要であると事前に伝えておく必要があることがわかった。そして、実践を振り返っての実践記録、文献や教員の助言も入れたレポートとは別の意味があることを事前指導しなければならないと感じた。